

阪神・淡路大震災から30年

私たちのまち、暮らしに甚大な被害を与えた「阪神・淡路大震災」から30年あまりが経過しました。計り知れない傷や悲しみを経験しながらも前を向いて歩いてこられたのは、多くの仲間とのつながり、励まし、支え合いがあったからです。



「共に備えるプロジェクト2030」を始動しました

節目を迎えた今、災害に「備える」さらなる一歩を踏み出します。食料備蓄の習慣づくりや避難場所の確認、訓練など、自らができる備えを考え、また過去の体験から、住民同士が助け合い、つながることを大切にしていきます。困ったときこそ、寄り添い、安心を与えられる存在になるよう、共に備え、未来へつないでいきます。



「備える」ことの大切さを伝える売り場



防災訓練を行う地域住民



地域の方々のつながりを深める協同購入グループ

終戦から80年

多くの尊い命が奪われた戦争の終結から80年が過ぎました。私たち生協の活動には、平和への願いが息づいています。1981年から40年以上続いている募金活動「平和のカンパ」には、組合員の大切な願いが込められています。



平和の尊さを学びました

終戦から80年を迎え、組合員と学びを深めてきました。未来を担う子どもたちと戦跡を巡る旅や平和の映画会、学習会を開催。改めて今のくらしが当たり前ではないことに気がきました。戦争を二度と繰り返さないよう、体験を語り継ぎ、歴史を学び、平和の尊さを未来につないでいきます。



被爆地・広島戦跡を自転車で巡る旅



沖縄の戦跡を巡る親子



語り部の話を聞く中学・高校生



長崎平和のカンパ寄贈の旅に参加した中学・高校生が、報告の一環として学んだことをまとめた新聞が、神戸新聞社主催の「ことまど新聞コンクール」で大賞を受賞しました。

2025国際協同組合年

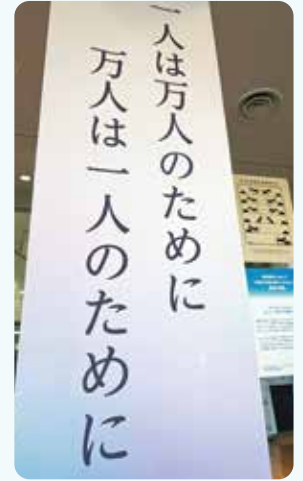


国際協同組合年

協同組合はよりよい世界を築きます

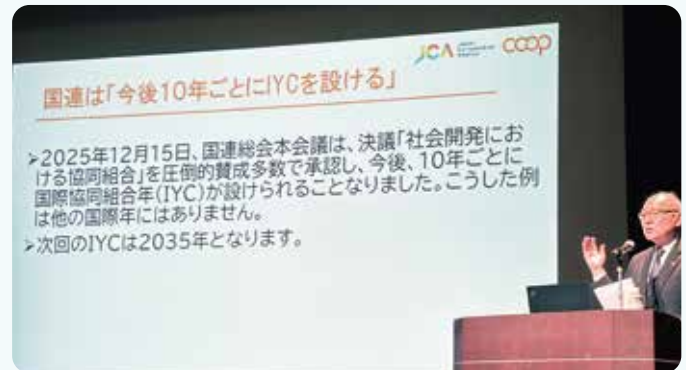
国連は、さまざまな分野でSDGs(持続可能な開発目標)に貢献している協同組合を評価し、その認知の向上を図ろうと、2025年を2012年に続き2回目の国際協同組合年に決めました。

これを受け5月、「国際協同組合年に当たり協同組合の振興を図る決議」が衆議院本会議、参議院本会議で採択されました。



協同組合を学び直し、仲間との連携も深めました

国連の決議に基づき、今後10年ごとに「国際協同組合年」を設けることを決定しました。これからも協同組合同士つながりを大切に、より一層SDGsの達成に向けた取り組みをすすめ、助け合い、支え合い、やさしさがあふれる地域社会の実現をめざしていきます。



▲協同組合の仲間が協力して実施したかいぼりの様子



11月、「協同組合の役割と可能性の再考」と題したワークショップをオンラインで開催し、大学生や若手職員がドイツの若者と交流。ドイツの農村協同組合の創設者ライフアイゼンと日本の生協の父、賀川豊彦について学び、助け合いの精神を大切にする協同組合への期待を改めて感じました。